



冬の祭典の華といえ
ば雪像と氷像。中でも
氷彫刻をイベントの華
に育て上げた道内草分
けは氷土会、といつて
も過言ではありません。
その一員として、冬に、
夏に、道内各地の祭り
会場を巡って八面六臂
(はちめんろっぴ)の
活躍。一瞬の輝きを際
立たせる美しさを追い
かけて、「祭り男」は
各地を巡ります。



冬、祭りが近づくと、心がうずくように本格的な創作活動の準備にかかります。そんな活動がもう20年以上も続いています。

氷彫刻制作の本格シーズン・インを告げるのは、例年町の成人式準備。新成人を迎えるため、農村環境改善センター正面玄関前に飾る氷像作りからスタート。

それが一段落すると、道内で最も早い冬の祭典「ひがしかわ氷まつり」で、引き続き日本氷彫刻会旭川支部氷彫刻コンクールの作品作り(今年は1月17、19日の3日間)。

祭り見物もそこに、続いて「おびひろ氷まつり」「旭川冬まつり」「さっぽろ雪まつり」「あばしりオホーツク流水まつり」と、メンバーで手分けして2月まで道内各地の冬まつり会場を飛び回って大忙し。今季最後の氷像作りは、忠別ダムイベント(2月21日)。「冬の車の走行距離は千キロくらいかなあ」。自宅に帰るのは着替えの交換だけ、という状態も珍しいそう。

◇ 商工会青年部で大氷像作りを手伝ったのがきっかけ。「その当時は大氷像の城を制作していた時代。」

『自分の仕事と一緒だな』という感覚で違和感がなかった」と気付いたら早くも25年目を迎えました。氷彫刻というジャンルを道内でポピュラーなものに育てたのは、

町内で日本料理店を経営していた故加賀城章氏ら、44年前の会創立メンバー。東川氷土会の歴史は、氷彫刻コンクール大会で賞を総なめにしてきた往時の名声とともに、今もなお引き継がれています。

現在の会員は14人。今年も明後草々、中国・ハルビン国際氷祭り(1月5日から開幕)の国際氷彫刻コンクールに会員3人が出場しました。

夏は、花火師として道内各地の祭りから「お呼び」がかかります。昨年は7月中旬、函館を振り出しに、8月まで夏祭り最盛期に「網走・函館・東川・北竜・稚内・帯広・豊頃・足寄・釧路」と、寝る間も惜しんで約4千キロメートルを駆け巡りました。

氷まつり児童作品作りの指導



氷まつり指導

第二小、第三小の氷彫刻作り



氷土会会館(東町2)



成田鉄工所

なりた たかし
成田 隆さん/東川氷土会会長/南町2 ☎82-2558(成田鉄工所)
東川町出身、49歳。道立旭川工業高校卒。明治末期か大正初期に名古屋から移住した5代目。移住当初は農家でしたが、3代目のころには、町内で主に農機具修理をする鉄工所の経営を始めていたそうです。25歳、商工会青年部の時に氷像作りを手伝ったことがきっかけで氷土会入り。昨年、盛永幸男前会長を引き継ぎました。旧町内会館の建物をそのまま使った氷土会会館が活動拠点。花火師の資格である(社)日本煙火協会発行の「煙火打掃従事者」資格者。夏の祭りシーズンは花火打ち上げ、冬季の祭り期間は氷像作りで全道各地を巡って大忙し。